

山尾三省の「びろう葉帽子の下で」論

——異文化としての東洋的田園世界

加藤 國安

(漢文学・中国事情研究室)

はじめに

人類の生存環境としての自然がきわめて深刻に衰弱していく中、豊かな自然をベースにはぐくまれてきた人類の豊かな感性、また安定した人生観や未来へと連続していく世界観、そしてそこに深く根をおろして生まれてきた古典的文学や哲学・芸術が今崩れようとしている。現代人の精神風土は、この不変なる緑や土や水との関わりから分断された所で、また過去・現在・未来へと大らかに繋がっていくゆつたりとした時の流れを感じ得ない中で形成されている。

これまでの人間は、つらい苦しみに打ちのめされたような時、しばらく田舎や自然の中へ帰って休養をとりながら、また鋭気を蓄えていったりした。そこには安心感のある諸々の信頼関係や、傷心の人間をそっと包んでくれるような慈しみにとんだ愛情があった。いわば母なる世界のようなものがあつた。深い安らぎとどこかで繋がってあればこそ、また力を回復し全力で困難な問題へも再挑戦していったのだと思う。

しかし、今の人間は、そうした母なる世界からどんどん切り離されていき、ぎすぎすした生活環境で機能追求を第一義に生きている。帰るべき安息の世界もなく、ただ過酷な生存競争社会にさらされ続けるばかりである。現代人の神経は柔らかな弾力を失い、硬直し壊れやすい。その暗さは、古典世界と比較すると目を覆うばかりである。

こうした現代の危機的な局面に対して、我々もただ押し流されているだけではない。少なからぬ人々がいろいろに感じ、また考えたりしている。が、その思いを実践してみる勇氣も行動力も簡単には湧いてこないのが現実だ。ところが、中にはそこを強い気持ちで突っ切り、我々に一つの方向を示唆するような先例を開く人がいる。たとえば、反文明的哲学でもって現代社会と格闘する一人の詩人、屋久島在住の山尾三省はその一人だろう。彼について、筆者は前に彼の農業詩を通して、今日の我々における原初的な幸福のあり方をめぐって取り上げたことがある¹。農業という人類の一つの古典的生活法をもとに、人はその時どんな根源的喜びを実感できるのかを、陶淵明の同種の作品と比較して検討したものが、ただ農作業の現実の辛苦と詩的表現における喜びとの乖

離をどう考えればよいのか。山尾三省は、それについてどう見ているのか、この点について議論する紙数がなかった。そこで、小論ではこの問題についていささか考察してみたい。

一 農業の苦勞と喜びと

— 陶淵明の詩における

農業というものが辛さはあつても、喜びの一つの原点だというのは明快な事実である。収穫を無事済ませた時など、人々は喜びにあふれ、各地でにぎやかに秋祭りや感謝祭が行われる。問題は、そこに至るまでの長くてつらい労働や、期待された収穫を果たせなかつた時、あるいは現金収入があまりに少なく生活に支障が起きてきたりする時に、むなしさや悔しさに襲われてしまうことだ。

田園詩人の先駆者、陶淵明はこう詠んでいる。

「庚戌歳九月中於西田獲早稻」「庚戌の歳九月中、西田に早稻を獲る」

田家豈不苦 田家 豈に苦しからざらんや

弗獲辞此難 此の難を辞するを獲ず

四体誠乃疲 四体 誠に乃ち疲る

庶無異患干 庶わくは 異患の干す無からんことを

躬耕非所嘆 躬耕は 嘆く所に非ず

躬耕は 嘆く所に非ず

義熙六（四一〇）年九月、陶淵明四六歳の時の作。百姓の作業は苦しいものだが、それを回避するわけにはいかぬ。体中が疲勞でくたくたになるが、自分の願いは農作物が思わぬ災いに会わぬようにということだ。

：農耕生活は、少しも嘆くには及ばぬわ、とその辛苦の一端を語る。彼のこの心情はその後とも変わらない。義熙十二（四一六）年、陶淵明五二歳の作に次の詩がある。

「丙辰歳八月中於下澗田舎獲」「丙辰歳八月中、下澗の田舎に獲る」

貧居依稼穡 貧居して 稼穡に依り

勦力東林限 力を勤くす 東林の限

不言春作苦 言わず 春作の苦しきを

常恐負所懷 常に恐る 懷う所に背くを

貧しさと戦いながら、また農作業の辛さに愚痴をこぼさず、力一杯その日その日の労働をこなす陶淵明。心配なのは、収穫が期待通りにならなかつたときのことだという。

一方、生活苦や労働の辛さ、現代社会においてあえて農業を選んだ意義などについて、三省はどのように感じているのだろうか。彼の書いた詩文を読むと、無論、生活苦も労働の辛さも述べられてはいる。しかし、それは彼の主要な悩みにはなっていない。彼にとつてはそれは納得の上の選択であり、今さら大きな問題ではなかつた。むしろその文学の中心にあるものは、現代社会下の本質的幸福とは何なのかということだ。

東京を捨て屋久島に渡つたばかりの頃の三省は、当然のこと農作業をうまくはできなかつた。たとえば、こんな詩がある。

「じゃがいも畑で」

じゃがいもの花が咲きはじめた

白い可愛らしい花である

遅れてしまつたが

ようやく土寄せをする気になつて
うねの両側からざつとざつくと土を盛りたてる

(中略)

夕方のうす青い空の下で

じゃがいも畑の土寄せをしていると

土寄せ ということを理解するのに

また二年も三年もかかっていることを思う

土寄せをしながら しかしながら

私の幸福は今 全身を静かに流れている

三省は土寄せを理解するだけでも、「二年も三年もかかっている」という。それがどういふもので、どう作ればよいのか、体にしみこませるのにこれだけの月日を要したのである。なかなか土寄せする気にならなかったのだが、やっと鍬をとって両側から土を盛り上げる。こうすることで、根の部分の生育をしっかりとしたものにできるのだ。大都会から僻遠の島へ、これまでの暮らしとは大きなギャップのある暮らしへ。そんな回り道やら手間暇をかけて、彼が手にしたもの、それは「全身を静かに流れ」る「幸福」だった。

農業の苦勞と喜びと、そのあざなえる現実の中に、三省は何を求めようとしたのか。今、これを考えるのによい一作品がある。彼の代表的な組詩、「びろう葉帽子の下で」である。以下、これについて検討してみよう。

二 「びろう葉帽子の下で」の願

— シンプリシティへの回帰を求めて

農業をするということの意味を、さまざま作業を通して綴ったのが、三省の代表作「びろう葉帽子の下で」だ。この詩の執筆に関連して、三省はいろいろ記しているが、まずこの「びろう葉帽子」自体については、こう述べる。

びろう葉帽子というのは、むろんびろうの葉で編んだ帽子のことである。奄美や沖縄の郷では、びろうをクバと呼ぶからクバの葉で編んだと言った方がより正確かも知れない。形は麦わら帽子と全く同じであるが、異なるのはそれがびろうの葉で編まれていることと手作りであるという点であった。：その帽子の下で、山や畑に仕事をし、その間また約四十編の「びろう葉帽子の下で」と題する詩ができたのだった。

〔「自己への旅」³「虚無の輪」が広がる〕

摂氏五十度にも昇る(温度計が壊れてなければのことだが)夏の炎天下のもとでは、びろう葉帽子の広いふち取りは、それ自体で体に影を作ってくれる。帽子の下に顔があれば、顔の下に肩があり、全身がある。影は足までおおってくれないとしても、足はむしろ日に焦げて褐色に焼かれるほうが好ましい。びろう葉帽子は、まさしく夏の屋久島にふさわしい帽子である。

〔「島の日々」⁴「びろう葉帽子の下で」

クバは、生活の中でいろいろ役立つ植物である。筆者はこれで作った

団扇をもっているが、真夏の日射しの下、頭の上で風に鳴る涼しげなクバの葉を、缺で半分から切つてちよつと先を丸く整えてやれば、団扇が出来あがる。これであおいでいると、沖繩の風を手元まで呼び込む感じがする。三省は、このクバの葉を「びろう葉」と呼ぶ。それでもつて編んだ帽子が、「びろう葉帽子」である。

暑熱の屋久島での農作業で、少しでも身を守ってくれるのが、このふちの広いびろう葉帽子だ。三省にとつても、こんな炎天下で体を酷使する作業はつらい。しかし、彼にはそれ以上に、希望のあまりない現代社会の中で、魂の本質的な平安を探求したいという願いがあった。彼はこゝも述べている。

びろう葉帽子は、激しい肉体の作業を厭い、それにもかかわらず肉体の作業を愛さずにおれない私にびつたりで、それは、手仕事が減びてゆく時代であるにもかかわらず、手仕事こそは人間の真の平和の作業であるという思想にびつたりのものであったのである。たかが帽子と人はいふかも知れず、私もそのように思うのだが、チェルノブイリの灰降る、希望というものない時代にあつて、びろう葉帽子の下で、なおも希望という人間の光とともに在りたいと願うのである。(同)

帽子一つにこだわる自分に照れながら、その影が作る小さな恩恵の意味に感謝しつつ生きていきたい、彼はそう願うのである。きびしい自然の中でどうした希望を頼りに生きていこうとする実直で素朴な心情（シンプリシティ）をつづつたのが、「びろう葉帽子の下で」の作品群である。

「びろう葉帽子の下で」は、三省自身も前にいうように計四十二首か

らなる。その中には、「雲のかたち」「秋」などの詩も含まれているから、純粹に「びろう葉帽子の下で」と題する作品は、二十四首になる。ついで長いのが、「いろりを焚く」八首、「畑」六首、「こおろぎ」六首だから、三省の詩集の中でも圧倒的な長編の組詩だ。二十四首も延々と連なる作品は、まるで畝づくりから種まき、草取り、施肥、灌水：等と続く、一連の農作業のようでもある。以下、そのあらましを見てみよう。

その二

びろう葉帽子の下で

じゃがいもを 掘る

畝を入れるたびに

いくつものじゃがいもが 掘り起こされる

これは

百姓でもなければ 仕事でもない

ひとつの事実

ひとつの孤独

くりかえされる神秘

くりかえされる必然

びろう葉帽子の下で

今日もまた じゃがいもを掘る

じゃがいも掘りをする中で、三省はこの作業を、「百姓でもなければ仕事でもない」という。我々の目には、明らかに農業であり百姓と映るのだが、彼はそれを静かに否定する。ならば何なのか。彼は以下、「事実・孤独・神秘・必然」などの言葉を連ねるが、この飛躍が我々を一瞬幻惑に包む。が、このような言葉の中に、三省の豊かな詩情が発露する

のだ。

三省は自己の農業を、近代以後、職種のひとつとして価値づけられた「農業（百姓）」とか、日々こなさなければならぬ義務的な「仕事」とかではないと見ている。そういうマイナス評価的なものでは全くなく、むしろそれは神秘的なものとふれ合う原初的な営為であり、生きていくという上での厳肅かつ必然的事実というふうに彼の中では再認識される。たとえば、彼は次のように述べている。

人の心の奥には故郷ふるさとという概念と入り混じって自然回帰への強い普遍的な願いがある。自然、大地、故郷、狩猟採集経済、これらにあえてもうひとつ加えるならば、「百姓」という言葉でさえもが、普遍的回帰の願望の対象として人々の心の内に秘められている。けれどもこの願望を自ら実現しようとする人の少ないことは、現在の工業文明の繁茂ぶりを一目見れば明らかであり、…。

〔聖老人せいろうじん〕「桑の木の树下」〕

農業は、「自然、大地、故郷、狩猟採集経済」などとともに、人間の普遍性への回帰願望の一对象である。——この見方は、反現代文明的立場から農業を新たに捉え直す三省独特のものだが、そういう哲学を基盤にする者だけにまた、今日にあつてはきわめて孤独な生き方を強いられるもするのだ。そこに、彼の矜持と苦悩が葛藤を続ける磁場が働くのだが、農業の辛苦と喜びとともに受け入れていくことで、彼は単純な感情を昇華し、シンプリシテイ（質朴）というある深みをもった思想的抒情に遭遇しているように思われる。

三 「びろう葉帽子の下の」の哲学

— その悲しみと怒り

しかし、彼も人間、生身の苦しさをつぶやかかないではない。が、そのつぶやきがまた真摯な誠実さを示す好個の詩篇となる。次の詩を読んでみよう。

その三（内容ごとに仮に節に分ける、以下同じ。）

びろう葉帽子の下の

じゃがいもを 掘る

物言わず じゃがいもを掘る

（チエルノバイリの灰降り）

百の怒りが

わたしの内に ないわけではない

（チエルノバイリの灰降り）

また百の悲しみが ないわけでもない

それらに 身と心をゆだねないために

また じゃがいも自身を掘るために

びろう葉帽子の下の

じゃがいもを 掘る

びろう葉帽子の上には

四十度の直射日光が降っているが

びろう葉帽子の下には

冷たく湿った土と

じゃがいもであるわたくしがある

(チエルノブイリの灰降り)

百の怒りが ないわけではない

百の悲しみが ないわけでもない

びろう葉帽子の下で

呼吸をととのえ 物言わず

じゃがいもを 掘る

炎天下のもとで、彼はただひたすらじゃがいもを掘り続ける。「物言わず じゃがいもを掘る」。黙々と掘るのは、何も考えていないからではなく、さまざま悲しみに「身と心をゆだねないため」なのだ。「チエルノブイリの灰」が、農作物に悪い影響を与えないかと、とても心配だが、無論、世の中の悲しみはこれだけではすまない。「また百の悲しみが ないわけでもない」。いな、悲しみだけではない。さらに「百の怒りが ないわけではない」と、彼は堰を切ったように続ける。この辺の意味する所は、三省の思想を知らないと分かりにくい。たとえば、こんな発言がある。

水爆や宇宙兵器のような権力的な武器そのものは別として、ぼくらは現代文明の全体を否定しようとするものではない。だが、これほどに繁茂した文明の現代と、原始未開時代と呼ばれる時代とを比較して考える時、文明は必ずしもよいものでないばかりでなく、むしろ多くの点で生命を圧殺するものであることに簡単に気づく。…水道は殺菌されているが、水の味とは違う。蛍光灯は明るい、

細胞を破壊する。車は早い^{マッパ}が、歩くことを忘れさせる。機械は便利だが、物を作る欲びを忘れさせる。テレビは何でも映してよすがが、自分の裸眼で実物を見る楽しみを奪ってゆく。…数えあげればきりがない。…
〔聖老人〕「部族の歌」

彼のいう「百の悲しみ」「百の怒り」とは、現代文明の負の側面全体を指すと考えられるが、「それらに 身と心をゆだねないために」、彼は黙々とじゃがいもを掘るのである。彼にとつて、悲しみや怒りとはそうした現代文明の不幸を背負いつつ、もがかねばならないことへの違和感であり抵抗の感情なのだ。かくて、三省は押さえきれないものに襲われる。(チエルノブイリの灰降り) が三回、括弧にくくられてつぶやきのように語られているが、なんでこんなものが空から降ってくるのかという悲しみや怒りが、怒濤のように三省の胸の内に押し寄せてくる様子が想像される。しかし、彼はそれを静かに押し戻しぐつと飲み込み、「呼吸をととのえ 物言わず」仕事を続けるのだった。

三省は、核兵器および原子力発電所廃絶主義者の一人である。こんな記述がある。

地球がひとつの共通の全体であることを、明確に知らされた最初の世代である私達は、政府及び国家、国境という古い秩序を越える、新しい平和の秩序を現実的に創り出してゆくことを、核兵器及び原子力発電所の廃絶のプログラムと共に、同時に始める時に来ていると思う。

自然地球を惑星地球と呼んでもいいが、…私としてはやはり自然地球という、土と森と山と川と海と、生きものの充滿している呼び名を、新しく、しかしながら旧石器時代以来続いている不変の呼び

名として呼びたい。

〔島の日々〕「南の光」

太古の昔からの「不変の呼び名として」の「自然地球」が「死に面している」〔食パンのうた〕。そんな中、今、どうして自分は自分として生きていけばよいのか。その彼の悲しみや怒りを、詩の中で具体的に述べたものが、「びろう葉帽子の下で」の次の詩である。

その十

びろう葉帽子の下で

じゃがいもを 掘る

はだしの足を 土の中に突っこんで

一鍬一鍬 じゃがいもを掘る

それは

ニカラグアのインディオ達の

深い怒りへの共感と連帯であり

アイヌシモリの人々の

深い悲しみへの共感と連帯であり

統治 というものがない世界へ向けての

わたくしひとりの 常にささやかな出発である

ここで三省は、インディオやアイヌ達の被圧迫民族の「深い怒り」

「深い悲しみ」に共感と連帯意識を覚える。彼は人類が国家の政治力を強めたことで、少なからぬ民族がその犠牲になったと理解するのだ。彼にとつては、国家よりも個人にこそ、あるいは個人の集まった「部族」のような素朴な社会形態にこそ、偽りのない生き方の原点があると思われるのである。これに関連して、三省は次のように記す。

なぜ僕が国家にこだわるかという点、これまでに世界史上に出現しては消えて行った幾百千の国家というものを眺める時に、いくぶんの善政、いくぶんの慈悲、いくぶんの寛容はあったとしても、どれひとつとして民衆を苦しめなかった国家というものはなかったからである。

〔自己への旅〕「心土に向けて鍬を打つ」

三省の理想―それは、「統治」というものがない世界」に暮らすことだった。そうした世界は、古代中国では老子の「少国寡民」の思想が知られる。三省もしばしば老子に言及しているから、おそらくこの思想についてはよく理解しているだろう。たとえば、

「いろりを焚く」その七

静かに いろりが燃えあがる

静かに いろりが燃えるとき

じつは静かに わたくしが 燃える

両側の太木が たのもし

阿弥陀経と 法華経がたのもし

ラーマクリシュナと ラマナ・マハリシがたのもし

老子と荘子が たのもし

(中略)

二本の太木を 間をあけて並べて

その真中で

今晩も 心をこめて いろりの不思議を焚く

〔びろう葉帽子の下で〕二六四―五頁

「びろう葉帽子の下で」その二十四

―第三回 バック トウ ネイチユア コンサートに―
樹齡推定七千二百年

その杉がこの世の生を受けたのは
縄文時代もまだ早期のことであった

イエスキリストはむろんのこと

ブッダも老子もまだこの世に現われておらず

むろん天照大神もまだその名で呼ばれず

太陽として照り 雨が降り

人々はただいのちある人々として その下で

小さな里を作つて真実に暮らしていた

〔びろう葉帽子の下で〕三三〇頁

などという詩には老子の名も掲げられている。さらには、福岡正信著『自然農法 わら一本の革命』（春秋社 一九八三）を読んでの感想として、その中の一節を引いている。「老子が無為自然といった、この一言を見ても、老子が百姓であれば当然、自然農法をやっていたと思われるわけです」と。

また三省は、このようにも述べる。

ブッダなりキリストなり、孔子、老子、あるいは莊子というよう
なそういう存在が残っていた言葉というのは、自分の体でゼロか
ら体得していく以外にないんですよね。存在の智慧というのは一世
代しか持たないものです。そして世代ごとに循環して、もう一回ゼ
ロから学び直さなければならぬものなんです。

〔「アニミズムという希望」第七話「存在するものの智慧」〕

三省の思想が、このような古典的東洋哲学を中心に形成されているのは、きわめて興味深い。

続けて、「びろう葉帽子の下で」その十の先を読んでみよう。

びろう葉帽子の下で

じゃがいもを 掘る

すねまでもかぶさってくる 土の感触を喜び

その自由を 味わいつつも

ひとつの ぬきさしならない悲しみと共に

憤りと共に

じゃがいもを 掘る

びろう葉帽子の下で

じゃがいもを 掘る

そのじゃがいもは

わたくしの最終の 悲しみと憤りであり

最終の 共感と連帯である

祈りである

はだしの足を 土の中に突っこんで

びろう葉帽子の下で

一鍬一鍬 じゃがいもを掘る

三省にとつて、じゃがいも畑の作業は、喜びと「ぬきさしならない悲しみ：憤り」とが共存するたえざる試練の場だった。鍬をもって畑に入

るとききの重くのしかかる心情を、三省はこう記す。

一本の鋤を持ち野に立つ時、これから始まる作業の困難さに私は途方に暮れる。鋤一本の打ち込み方によつて人生が決まるかも知れぬと思うからである。この厳かな困難さは、だが有機農業にたずさわる者への天地の祝福である。ともかく鋤を地に打ち込まなくてはならない。その瞬間から新しい農業、地の内なるバクテリアや無機物やみみず、天なる無窮の星々、太陽と月、雨と風、そして私たちの親しい人間社会との有機的な関係が始まる。

〔「聖老人」〕「有機農業のすすめ」

しかし、ひとたび鋤をふるえば、「その瞬間から」さまざまなものとの「有機的な関係が始まる」のである。それはまさに彼に対する「天地の祝福」とも思えるのだった。有機農業は、三省にとつて自らが自らであるための不可欠の思想であり、また日々^{まいごと}の行のごときものでもあつたといえる。

その十五

びろう葉帽子の下で
草を刈る

四十五度Cの直射日光の下で
ブルーベリー畑の 草を刈る
急ぐことも

また 効用を求めることも不用
これは
わたくしが わたくし自身であるための

わたくし^のの核心であるための
仕事であり 哲学である

びろう葉帽子の下で
地に深く膝をつき
青々と繁る 美しい草を刈る

この詩には、三省の姿勢が明確に謳われている。「急ぐことも/また効用を求めることも不用」な有機農業。それは、彼の核心たる農民と詩人であるための「仕事であり 哲学である」。彼にとつての農業は、今日の苦悩する近代化された農業とはまったく異質な、面目を一新し高貴ささえたたえるものとして登場してくるのである。そして、彼は誇りをもつて高らかにこう宣言する。

私たちはここに新しく農業の安らかな火を高く揚げんとするものである。国の重工業偏重政策を無能なものとして背を向けるとともに、貴重な田畑を工業に売り渡し、あるいは化学肥料や農薬で汚しながら農業自体を工業化しようとする農民の悲しみにも背を向けて、新たに高貴な本来の農民の姿を回復しようとするものである。

〔「聖老人」〕「有機農業のすすめ」

四 新しい農業の詩学

— 千古、変わらぬものの希求

颯爽と時代の最先端をいく農民詩人と思われるかもしれないが、三省はそういう浮薄な注目を厳に慎もうとする。次の詩を読んでみよう。

その十七

びろう葉帽子の下で

汗にまみれて

草を刈っている

いつのまにか その腕に虻がとまっています

シャツの上から チクリと刺す

背中にも虻がとまっています チクリと刺す

草刈りの途中で、アブが襲ってきたのである。アブは腕も背中も刺しまくる。そのしつこさと痛さに耐えながら、だんだん怒りと悲しみが湧いてくる。

びろう葉帽子の下で

汗にまみれて 草を刈っていると

刺しバエがやってきて

山羊にたかるように

シャツの上から チクリチクリと

わたくしを刺す

おれは山羊ではないわい

人間だわい

怒り 悲しみ

虻を殺し 刺しバエを殺す

そのためにまた 激しく汗は流れる

汗が流れれば それだけ

虻や刺しバエが寄ってくる

冷房装置のもとの 書齋詩人の姿をチラと想い

想う自らを恥じる

今度は刺しバエがやってきて、執拗にシャツの上から襲ってくる。ついに堪忍袋の緒が切れて、「おれは山羊ではないわい／人間だわい」と叫びながら、刺しバエもアブも殺してしまおう。その汗をぬらして、またアブと刺しバエがやってくるという悪循環。つい音を上げて、クーラーのきいた書齋で詩を書く詩人を羨んでしまおうという情けなさ。が、そんな自分の弱さを、彼は素直に恥じる。土臭い誠実さなのだが、質朴すぎるほどの人間性が、彼の農業詩を芸術の領分にまで高めているのである。そして、最後の節はこう詠まれる。

びろう葉帽子の下で

汗にまみれて 草を刈り

虻に刺されて 虻を殺し

刺しバエに刺されて 刺しバエを殺す

わたくしに刺され わたくしを殺す

汗まみれになりながら、怒りにふるえて彼は、アブも刺しバエも殺してしまふのだった。その時、彼は「わたくしに刺され わたくしを殺す」。厳粛な思いのすぐ側から、たちまち農業の辛苦に見舞われるのだが、その両極端の現実に対して、彼は自己欺瞞に陥らぬように見つめるもう一人の自己を感じながら、真つ正直に向き合っている。かくて激情にかられた己を、己の手により始末するのだった。

このように、喜びと悲しみと怒りのないまぜになつた中で、三省は一日の長い仕事を終える。すべてを終えて眺める夕陽は、自己の生きていくことをそのままに伝えてくれる気がして、静かな満足を覚えるのだつ

た。こんな詩がある。

「日暮れ」

夕闇が足もとから立ちのほり
西の空の一角だけがほのかに明るい日暮れ時
私は伏せた石うすに腰を下ろして
すでに暮れた山々と

ほのかに明るい西の空と
足もとから立ちのぼってくる

静かな夜の気配を眺めている

一日の肉体と心の労働が終わり

一日の喜びと苦しみが終わろうとしているとき

私はそれを瞑想で終わろうと願うのだった

この詩は、我々にかの陶淵明の「飲酒」其七を思わせる。

其七

日入群動息 日入りて 群動息ぐんどういき
帰鳥趨林鳴 帰鳥 林に趨おもむいて鳴く
嘯傲東軒下 嘯傲しゅうおうす 東軒とうけんの下
聊復得此生 聊いささか復た 此こゝの生を得たり

一日の終わりに訪れる静かな安息。農業は苦勞の多い仕事ではあるが、陶淵明も三省もそこに深く静かな喜びを看取するのだ。人間の本質的幸福とは何か。それは千古変わらぬ世界とともにありながら、かつ創造的な暮らしを営むことではないか、と三省はいう、

山尾三省の「びろう葉帽子の下で」論

農業者の仕事場は言うまでもなく田園である。近来、山川草木がすべて破壊されてしまったとはいえ、農業者の仕事場の環境は、都市就労者のそれと比べてはるかに良好なことだけは確かである。田舎の空気はおいしい。田舎の水はおいしい。田舎には山があり川があり、海がある。これらの自然の環境から日々惜しみなく与えられる喜びは、農山漁村に住む者の千古変わらぬ宝であり、誇りでもある。生き方の軸をひとつはずしさえすれば、この喜びは他のどのようない喜びにも劣らない深い喜びである。：

百姓のキャンパス、大地からは、大地自身の力による創造、つまり発芽や成長や実りが行われてくる。大地に対する百姓の働きかけは、大地自身の恵みと相関して二重の創造性の喜びを与えてくれる。

〔聖老人〕「山羊の死んだ日」

彼のこの視点からすれば、現代がたとえ創造的な可能性に満ちた社会であろうと、それが未来の自然環境を危ういものにするこゝと運動するのであれば、それは「生き方の軸」を根本から踏み誤るものと捉えられるのである。

おわりに

以上見てきたように、山尾三省の「びろう葉帽子の下で」の詩は、さながら太古のようなゆるやかな時の流れを土台にしつつ、「ひとつの真理が、死に面している」現代社会にあつて、農民詩人としての辛苦や静かな喜びを綴った組詩である。彼にとつて畑は、一つの道場のごときものだった。飾らない心から真率のことばが、清らかな光を帯びて生まれ

てくる。それは死に瀕した閉塞的なこの現代世界に、不思議な光彩と澄んだ響きをとめない、永遠なる土、水、空気となつて、はるかな東洋の田園世界より届けられたもののように筆者には感じられる。自然の荒廃化がかくまで進んだ今日では、このような牧歌的な田園詩はもはや異文化の世界としてしか映じない。三省の詩は、この異文化世界からのメッセージとして寄せられているのである。

最後に、彼の詩の深い精神性を物語る一編の詩を掲げよう。

「土と詩」

土が そのまま詩であれば

僕は 幸福をつかんだのであろう

詩が そのまま土であれば

僕は 幸福そのものであろう

だが

土の詩人は疲れて歌うことがない

詩人の土は無言である

幸福はいらない

生きてゆく

生きて心を実現してゆく

土は無限の道場アンリミテッド

詩はそこに正座する

農業における確固とした平和について、また「ゆつたりとしたリズム

ム」が、太陽や大地の運行とともにあることなどについて、三省は永遠の母なる世界への思いをこめて、こうも記す。

畑を耕す。種を蒔く。成長を眺める。肥やしをやる。収穫をする

——農業はその作業のどの部分を見ても平和で、静かで、確固とした性質のものである。肉体のすべてを使い、精神のすべてを注ぎ込むが、そのすべてはゆつたりとしたリズムの中で行われる。日々とともに、月の満ち欠けとともに、季節とともに行われる。それはゆつたりとはしているが寸分のすきも油断も許さない。許さないけれども結局はすべてを許す。太陽の下、大地のかけがえのない営みなのだから……。

（「聖老人」「桑の木の下にて」）

三省のこの立場は、今日、アメリカを中心として盛んになっている。自然環境文学ネイチュアライティングに繋がるものである。これについて、彼はこう発言している。

ビートジェネレーションと呼ばれて、一九五〇年代から始まったゲイリー・スナイダー、アレン・ギンズバーグそれからジャック・ケラワックなどという、当時の（アメリカの「筆者補う」）若手の詩人や作家達が、一生をかけて今のそのアメリカ社会を準備してきたんですね。循環する時間というものをもっと大事にしようじゃないか、自然というものを価値としようじゃないかということを推進してきたわけです。今アメリカでは、それは新しい自然環境文学ネイチュアライティングとして定着しています。

（「アニミズムという希望」第十四話「回帰する時間」）

東洋の田園文学は、今、ある部分ネイチュアライティング自然環境文学という新しい異文化的モードに装いを変えながら、時代を超えたものとしておのが存在を輝かせつつあるのである。

注

- (1) 拙稿「山尾三省の農業詩と陶淵明」(『愛媛大学教育学部紀要』第II部 第三十三卷 二〇〇一年)。
- (2) 『山尾三省詩集 びろう葉帽子の下で』(新装版 野草社 一九九三)
- (3) 山尾三省著『自己への旅』(聖文社 一九八八)
- (4) 山尾三省著『島の日々』(野草社 一九九一)
- (5) 山尾三省著『聖老人』(野草社 一九八八)
- (6) 山尾三省著『アニミズムという希望』(野草社 二〇〇〇)。これは琉球大学での特殊講義をもとにまとめられたものである。

(二〇〇一年五月二十四日受理)